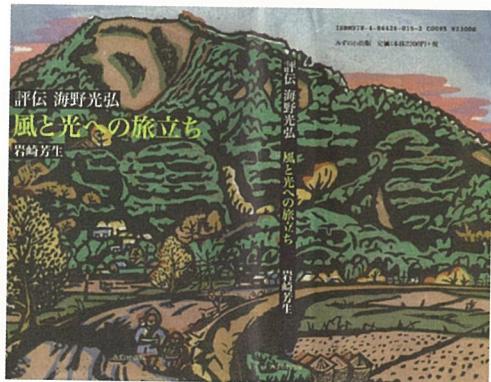


## 海野光弘のこと

## 安倍川のほとりの青春

岩崎芳生 (S32年卒)

本の表紙 光弘高校一年の版画  
『徳願時山風景』

私は昨年、海野光弘の芸術の生涯を評伝に書いた。これまでに小説集は四冊出たが、伝記は別物である。小説家の生命の想像力は極めて抑える必要がある。しかし書きたい相手は、高校からその死の床まで自分の身近かにいた友人である。資料を並べて良しとは出来ない。

幸いにも彼と静商同期の海野夫人（旧姓森克江）より、中学から二十五歳までの日記帳をお借りしていたから、あとは肉付けである。私は彼が当時の静岡市の西境の宇津の谷に出会い、古民家とそこに暮らす人々で開眼するまで、十年の歳月を要した。

そうして三十歳で描いた世界と技術を手に入れたとき、彼にはもう十年に満たない歳月が残るだけだった。その残りの年月、彼は時間との競争で生きた。肩に掛かかる染の職業、その時間をぬう取材の旅、徹夜もいとわぬ制作と個展。一方で、列島改造による古集落の消滅の速度。時間の残量を知る本能、それも才能の一つである。残量がなければ芸術家は生命をけざる。

い牧歌の村を板に刻んでいたのだ。その会が縁で、同期の四人が熱海に集つた。関東支部役員の木佐森達夫、中部労組のリーダー松永昌治の三君とである。彼らの共通項は「わが道を行く」と言えそうだ。

私事だが、一時は大江健三郎らビッグネームと文芸誌上で筆名を並べもしたが、それを職業とするには至らなかつた。あるいはその故に、今も細々と小説の筆を折らずに来たかもしれない。

海野光弘の精神形成期に同化することだった。

私は彼が好んだ学校の窓から見えた風景の中を歩いた。

内田さんも同席。ちょっと、

ユニホームは30年ぶり、それも

ユニホームは30年ぶり、それも